

メッセージアウトライン

ヨハネ20：24~31 「見ずに信じる者」

「十二弟子のひとりでデドモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたときに、彼らといっしょにいなかった」(24) 「デドモ」→「ふたご」の意。ふたごの兄弟がいたか、イエスとそっくりの容貌をしていたのかもしれない。彼は仲間たちとそこにいっしょにいなかったために、イエスに出会う時を逸した。クリスチャンの交わりから自分を引き離し、ひとりになろうとする時、私たちは大切なものを失うかもしれない。私たちがひとりである時には起こらないようなすばらしいことが、教会の交わりの中では起こりうるのである。トマスが他の弟子たちのところに戻ってみると、彼らは口々に「主を見た」と彼に告げた。(25) しかし彼は現実主義者で疑り深い性格であったようだ。彼は、「私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところ差し入れ、また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません」と言った。

「八日後」(すなわち次の日曜日)、イエスは再び弟子たちのところに来られた。今度はトマスもいた。戸はやはりきちんと閉じられていたが、イエスはまたもその部屋の中に突然現れた。今回イエスが現れたのはトマスのためであった。

「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしのわきに差し入れなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい」(27)イエスは八日前のトマスの疑いのことばをちゃんと横で聞いておられたかのように、このように言われた。完全な証拠が今、トマスの目の前に示されている。もはやトマスは不信仰にとどまることはできなかつた。

「トマスは答えてイエスに言った。『私の主。私の神』」(28)ここで彼は、改めて心からの信仰告白をしたのだった。その彼にイエスは言われた。「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ずに信じる者は幸いです」(29) 疑り深いトマスは実際に復活のイエスを見て信じた。他の弟子たちも見て信じた。しかし、彼らが地上から去ると、後の時代の人々はもうイエスを見ることはできない。しかし、初代の弟子たちが、また疑り深いトマスがイエスを見て信じたということは信じることができる。イエスが言われたように、見ずに信じる者は幸いなのである。これは彼らよりも後の時代に生きている私たちに向けても語られていることばである。復活のイエスに出会った彼らは変えられた。彼らは死をも恐れぬ者として福音を宣べ伝えるに全世界へ出ていく者となった。今、私たちに求められているということは、この「見ずに信じる」ということなのである。

この書が書かれた目的は、これを読む人々がイエスが神の子キリスト、救い主であることを信じるためであり、また信じた人々がイエスの御名によっていのち(永遠のいのち)を得るためである。(30,31) この箇所はトマスの信仰告白を頂点として、一旦ここで、この福音書がまとめられているところである。

私たちも単にイエス・キリストのことを知っているということにとどまることなく、トマスのように、「私の主、私の神」と心から信じ、告白し、喜びと感謝と従順の思いを持って従っていきたい。

最後に→ヘブル11:1, Iペテロ1:8~9